

昇段審査を受審させていただいて

日置 正恵

この度は昇段審査を受審させて頂き、誠にありがとうございます。極真空手の昇段審査を受審させて頂くことは、私にとって身に余る栄誉であり、これまでご指導・ご鞭撻・ご助力・ご協力を賜り、審査受審に導いてくださった奈良支部の秦師範、支部長の伊藤先生、天理道場の観世先生、指導員の裕原さんをはじめ多くの先生方、先輩方、道場生の皆様方、関係者の方々に深く感謝申し上げます。

審査の際は私の努力不足、実力不足により、お見苦しい姿を晒したにも関わらず、周りの方々が最初から最後までずっと励ましの声援を送ってください、勇気を頂きました。十人組手では、決して手を抜くことなく突き、蹴りを繰り返しながらも接近して顔が近づくと「頑張れ！」と声を掛けて下さる方も何人かおられました。途中で疲れが出て気を失いかけていましたが、横で西先生が必死で叱咤激励して下さったおかげで、フラフラしながらも最後まで立っていることができました。周りの方々の厚い支えが無かったなら、審査途中で挫折していたに違いありません。

私が極真空手を意識したのは、中学生のときに『四角いジャングル』に描かれた、大山総裁率いる極真会館の方々の活躍を読んだのがきっかけでした。それから紆余曲折はありましたが、三十一歳になる年に念願が叶い、極真会館奈良支部に入門することができました。

入門した道場での稽古は『地上最強のカラテ』の名のとおり厳しいもので、補強では歩行が困難になる程の全身筋肉痛にみまわれ、組手では先輩の強烈な突きや蹴りをもらい、道場から病院に直行したり、長期間見学だけの稽古になってしまったこともありました。しかし、極真会館は厳しく激しいだけの組織ではありませんでした。先生方、先輩方や道場生、関係者の方々が大変親切で温かい方ばかりなのです。稽古中に懇切丁寧にご指導を下さるだけでなく、稽古後にも日常生活の中でのトレーニング方法や、体調管理について助言を下さったり、食事にお誘い頂き、空手や様々な武道、格闘技、格闘家にまつわるお話を教えて下さったり、仕事の相談に乗っていただいたり、あらゆる面で親身に面倒をみていただきました。何の才能も無くハートも弱い私が、今日まで極真会館で空手の稽古を続けてこられたのは、こうして家族も含め、周りの方々に温かく支え続けていただいたからに他なりません。

晴れて黒帯をお許しただけなら、自分自身精進を続けるのはもちろんのこと、これから上級帯や黒帯を目指す道場生の方々に、自分が周りの方々にからしていただいたように精一杯サポートし、また秦師範や伊藤先生が力を注いでおられる、少年・少女会員の育成に少しでもお役に立てるよう頑張りたい、今まで頂いた御恩をお返ししていきたいと存じます。

本当にありがとうございました。

押忍